

日本語発音の言いあやまり分析*

— おもに撥音, 促音, 撥音と促音, 拗音と直音について —

柳京子**

(e-mail : kjyoo@smu.ac.kr)

目次

1. はじめに
 2. 日本語の言いあやまりの分析研究
 3. 日本語の「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」の言いあやまり調査と分析
 4. おわりに
-

1. はじめに

言いあやまり研究は言語教育実践にも影響を与え, 第二言語習得過程に大きな示唆を与えつつある。それは言いあやまり研究が, 1960年代末までに第二言語習得に関して主流となっていて対照分析や行動主義理論では予測も説明もされなかった学習者の誤りを説明し, 今日の言語学理論と応用言語学の領域とを関連づけることができたからである。

本研究では先行研究で明らかにされていない, 次の二点に力点をおき, 研究を行う。

1. なぜ, 言いあやまりが起るか, その原因を探るために言いあやまりの中でとくに注目されているインターランゲージ (Interlanguage: 中間言語) に関する仮説を設定し, その仮説を言いあやまりの調査から検証する。
2. 従来の主観だけによる方法から脱却して, 調査資料の検討, あるいは分析結果に基づく研究をする。

これらは, 先行研究の何れにも十分に組みこまれていない研究である。

* 本研究は祥明大学校内研究費の支援による論文である。

** 祥明大学 教授 日本語学

本論文では、このような問題意識に基づいて言いやまり研究を実践的な面(教育的な面)の側面から、より体系的にとらえていくことを目指している。

2. 日本語の言いやまりの分析研究

第二言語習得において、第一言語の干渉度は大きな影響力を持つ重要な因子である。同時に第一言語の干渉度は、学習者が対照分析仮説に基づいた予測どおりの音声体系を持つものではないということもあわせて示している。このことは、インターランゲージ体系の解明に、対照分析仮説だけでは不十分であることを示唆するものである。したがって、対照分析仮説を含めた複眼的な視点からのインターランゲージ体系の研究が、今後求められるのである。

最近の言いやまり研究では、インターランゲージ体系、すなわち、第二言語体系とも違うインターランゲージ体系の存在を確認し、その特質を明らかにしようとする研究がなされつつある。これらの一連の研究から、第一言語の干渉とは異なったインターランゲージが音声レベルでも存在することが証明されることとなった。インターランゲージ音韻論大家のひとりであるTarone(1980)¹⁾は量的観点から、干渉エラー、非干渉エラーの割合を見ることによって、インターランゲージの音韻構造の存在と実体を確認しようとした。これに対して、Eckman(1981)²⁾ はいわば、質的にインターランゲージの音声体系のルールを、厳密に第一言語と第二言語との比較、検討することによって、音声レベルにおけるインターランゲージの本質を明らかにした。Eckmanの結果は、Taroneの研究と、インターランゲージに非干渉エラーがあることを認めた点で一致しているが、さらに一歩進んで、インターランゲージ体系が完全に自然なものではないことを実証した点に注目してよいであろう。

また、Eckman(1981)³⁾は、Jakobsonの有標性(markedness)理論⁴⁾を導入し、有標性

1) Tarone,E.(1980)Some influences on the syllable structure of inter language phonology. IRAL(International Review of Applied Linguistics in Language Teaching) Vol.18 No.2, pp139-152.

2) Eckman,F.R.(1981)On predicting phonological difficulty second language acquisition. Studies in Second Language Acquisition, Vol.4 No.1, pp.18-30.

3) 注2と同様。

4) 有標性理論では、世界の諸言語において、ある言語的要素が他の要素より基本的かつ自然で、使用頻度が高いとき、その要素を無標(unmarked)とし、他の要素を「有標」であるとするものである。この理論では、子音と母音について「基本 複雑」のスケールが観察されると主張している。これは、最初に現れる母音の対立は広母音と狭母音(例えばpa pi)の2母音であり、次に現れる狭母音の前舌 後舌の対立(例えばpa-pi-pu)が、広母音 中母音 狭母音の対立であるという。子音の有標性は、次のようになる。

破裂音>摩擦音>破擦音 [p][t][k]>[b][d][g] [s][f]>[z][v]

この有標性理論については次の文献を参考にする。

Jakobson,Roman(1939) Les Lois phoniques du Langage enfantin et leur place dans la phonologie

の概念を対照分析と組み合わせれば、第二言語の相対的学習難易度を予測できるという仮説を立て、中国人（広東語を第一言語とする）の英語学習者の発音データを使うことによってこれを裏付けている。このような音声環境の問題は、日本語と韓国語の対照分析の場合と非常によく似ている。例えば、日本語と韓国語の対照分析仮説では、学習初期における誤りばかり関心がはらわれ、韓国語を第一言語とする日本語学習者の音声体系の発達過程という側面に注意を向けなかったことである。このように対照分析仮説の限界は、学習初期における誤りばかり関心がいき、学習者の音声体系の発達過程という面に注意を向けなかったことであった。

Major(1987)⁵⁾は、インターランゲージ音声体系の発達過程を、第一言語干渉と発達上のプロセス（developmental processe:近似化、過剰一般化、第一言語習得プロセスなど）の影響力の変化を用いて説明している。このモデルによると、発達過程の初期には第一言語干渉が優勢で、これが徐々に少なくなっていく。一方、発達上のプロセスは第一言語の干渉が初期には少ないが、徐々に増え、中期にもっとも多く、その後減少していく。Majorはブラジルの英語学習者の発音を分析し、この発音発達過程のモデルを支持する結果を示している。

これまで述べてきた問題点をふまえて、本研究では韓国語を第一言語とする学習者における日本語学習者の言いあやまり分析を、次のような点に重点をおいて行う。

- 1) 日本語発音のどのような音声環境（語頭、語中尾、短文）が、日本語発音の不自然さにもっとも影響を与えるのか。
- 2) 日本語学習者のインターランゲージの日本語音声体系に共通する特徴は何か。
- 3) 日本語音声の習得上、日本語の不自然さが一番高い項目と、その日本語の不自然さにもっとも高い相関関係があるのは、どのような日本語の発音であるか。
- 4) 日本語学習者の第一言語からの影響とは別に、言語の普遍的特性（有標性）が日本語音声の習得にどのような影響を与えるか。ここでは、有標性（世界の諸言語においてある言語的要素が他の要素より基本的かつ自然で、使用頻度が高いとき、その要素を「無標」とし、他の要素を「有標」とする）の概念と言いあやまりの仮説に基づいた分析を行う。

générale 邦訳「幼児言語の音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。

Jakobson,Roman(1941/68) kindersprache, Aphasia und allegemeine Lautgesetze Child Language Aphasia and Phonological Universals. TheHague: Mouton.

邦訳「幼児言語、失語症および一般音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。

窪蘭晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店。

窪蘭晴夫(2003)「音韻の獲得と言語の普遍性」『音声研究』第7巻 第2号, 5頁-17頁。

⁵⁾ Major,R.C.(1987) A model for interlanguage phonology. in Ioup, G. and Weinberger, S. H.(ed), pp. 101-124.

以下では、このような言いあやまり分析に基づいて、韓国語を第一言語とする学習者における言いあやまりの調査と分析を行う。

3. 日本語の「撥音」「促音」「撥音と促音」 「拗音と直音」の言いあやまり調査と分析

ここでは、韓国における日本語音声の中で「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音の拍数同じもの」「拗音と直音の拍数の違うもの」について聴覚的、音声（調音）学的な特徴にその焦点をおき、韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す（読む）ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い、その分析を行った。この調査分析の結果から、韓国での日本語音声教育方策を統合的に立てるための基礎的資料を得ることも、この研究の一つの目的とするものである。

3.1 言いあやまりの調査方法

○ 非調査者

調査対象については、韓国の祥明大学校の日語教育学科の学生で、学年ごと（1年生から4年生まで）に各40名を無作為に抽出した。

3.2 言いあやまりの調査手続き

○ 記録方法

調査資料の作成については、祥明大学校の語学実験室でオリエントTEAC R666XカセットテープレコーダーとAT 811 AUDIO TECHNICAを使用した。

○ 分析方法

筑波大学大学院の言語教育実験室で博士過程の教育学研究科の人文科教育学領域の日本人学生9名に調査したのを聞いてもらい、それぞれにおける全体的な不自然さと単語（語頭、語中尾、短文）の不自然さについて5段階で評価してもらった。これらを別々に集計し、その結果を比較検討し、最終的な調査結果をまとめたものである。ここではおもに、日本語の4項目での平均と相関を出した。計量の方法は、音声言語および精神物理学の分野ですでにその妥当性が実験的に確認されている、9点法のEqual appearing intervalsと呼ばれるものを用いた（Mihihan, 1958）⁶⁾。

⁶⁾ 2種類の量X, Yの間の相関を次のような量rで与える方法である。

$$r = \frac{\sum(X_1 - \bar{X})(Y_1 - \bar{Y})}{\sqrt{\sum(X_1 - \bar{X})^2} \sqrt{\sum(Y_1 - \bar{Y})^2}}$$

3.3 言いあやまりの調査資料

本調査のデータは、日本語（東京方言）の聴覚的、音声（調音）学的な特徴に基づき、韓国語を第一言語とする学習者にとって困難であると予測される「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音の拍数同じもの」「拗音と直音の拍数の違うもの」の問題に関するものである。非調査者に提示した文は、「撥音」〈12文〉、「促音」〈11文〉、「撥音と促音」〈10文〉、「拗音と直音」〈23文〉である。この資料は最後の資料編に示した⁷⁾。

3.4 調査結果の分析

(1) 撥音

まず、「撥音」を単語、短文と分けて40人の被調査者を9人の日本人聴取者によって不自然と判定された結果を示したのが下の表1)である。表1)の例文ごとの全学年の平均をみると単語では、例文1)「さんま[samma]と「しんぶ〈深部〉」[ʃinbɔ̃](2.77)が、短文では例文6)「あの銀行[ginko:]の建物は技巧[giko:]的すぎる」(3.15)の不自然さが一番高かった。単語の場合は[m][b]のまえて、短文では[k]のまえて不自然さが高い。短文の例文6)の結果は、柳(2009)⁸⁾の研究の中で「カ行とガ行」の調査分析結果で[ko]の発音の不自然さをもっとも高くなったこと、また長母音「こう[ko:]」とを[kõ]発音するということによるのも考えられる。

表1) 「撥音」における例文ごとに不自然さの程度(1~5)の評価結果(数値は5段階評価による平均値である。以下同様。)

例文		1年生	2年生	3年生	4年生	全学年
単語	1)	3.22	2.57	2.60	2.68	2.77
	2)	3.10	2.50	2.50	2.40	2.63
	3)	3.33	2.57	2.30	2.47	2.67
	4)	3.03	2.60	2.40	2.50	2.63
短文	1)	3.33	2.80	2.63	2.40	2.79
	2)	4.15	2.70	2.45	2.22	2.88

X_i , Y_i はそれぞれX, Yの平均値である。 r が1のとき、XとYとの相関はもっとも大きく、0のとき、相関はまったくない。

Mihihan, H.R. (1958) A development of Reading Scale Technique Based upon Informal, Oral Descriptions for Measuring Foreignisms to American Speech, Master's thesis, Ohio State University.

⁷⁾ 今田滋子(1981)『教師用日本語教育ハンドブック 6 発音』国際交流基金、128頁-134頁。

⁸⁾ 柳京子(2009)『日本文化学報』第40号 韓国日本文化学会、11頁-12頁。

3)	3.23	2.68	2.37	2.32	2.65
4)	3.05	2.55	2.20	2.02	2.46
5)	3.35	2.47	2.45	2.45	2.68
6)	4.18	3.20	2.75	2.47	3.15
7)	3.35	2.50	2.20	2.38	2.61
8)	3.10	2.65	2.55	2.20	2.63

戸田(2003)⁹⁾の研究によると、外国人学習者が日本語特殊拍を習得する際に、「撥音」は聞こえ度が高く言語の個性性に依存する問題が多いとしている。また、英語話者の「撥音」にはピッチの誤用や、調音点による逆行同化が起こらないことなど、持続時間以外の問題が多く関わっていると述べている。「撥音」の研究に関しては今後緻密な実証研究が必要といえる。

「撥音」について学年ごとに評価してもらった結果を、表2)に示した。また、「撥音」をさらに単語と短文とに分けて示したのが、表2-1)である。表2)をみると、学年が高いほど平均点が低く、自然さが増していくことがわかる。これをさらに、単語と短文に分けた表2-1)では、短文の場合、高学年になるにつれて不自然さがなくなるという傾向がみられるが、単語の場合には、3年生から4年生となると平均点が少し高くなる。これは、「撥音」と「撥音」の短文の場合、Majorのインターランゲージの音声体系の第一言語干渉(言語間の誤り)に当てはまる。すなわち、日本語発音の「撥音」の短文の不自然さが発達過程の初期では第一言語の干渉が優勢で高くなっているが、この現象が徐々に少なくなっていくのである。

「撥音」の単語の場合、発達上のプロセスに当てはまる。すなわち、発達上のプロセスでは日本語発音の「撥音」の単語の不自然さが初期に徐々に減少し、中期にもっとも少なくその後、ふたたび高くなっていく現象である。中東(1998)¹⁰⁾の研究によると、韓国語を第一言語とする日本語学習者には、「撥音」の単語の中でもとくに[N]の発音が難しいという調査結果が出されている。また、中東(1998)は、韓国語話者が撥音の口蓋垂鼻音[N]を、調音点が近接する撥音の軟口蓋鼻音[ŋ]で発音するものが多く、語により異なるがこのような傾向は約60%に見られたと述べている。これは本研究の結果でも同様である。

また、Eckmanの有標性の概念を加えると韓国語を第一言語とする日本語学習者には、有標性が高い。これは、日本語の音節構造(CV)と韓国語の音節構造(CVC)の

⁹⁾ 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』第7巻2号、日本音声学会、70頁-83頁。

¹⁰⁾ 中東靖恵(1998)「韓国人の英語音声と日本語音声」『音声研究』2-1、日本音声学会、72頁-82頁。

相違から音節長の問題である(松崎1999)¹¹⁾。しかし、撥音は単語を除けば韓国語を第一言語とする日本語学習者には、ある程度発音が定着しているように見られる。

表2) 「撥音」における不自然さの量(1～5)に関するの学年ごとの評価結果。

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.30	3.10	2.60	2.50
2	3.10	3.00	2.10	2.30
3	2.90	2.40	2.50	2.40
4	3.50	2.70	2.20	2.40
5	3.50	2.40	3.00	2.50
6	3.50	2.60	2.40	2.30
7	3.60	2.40	2.20	2.30
8	3.30	2.80	2.30	2.50
9	3.40	2.60	2.40	2.00
10	3.60	2.40	2.80	2.70
平均値	3.37	2.65	2.45	2.38

表2-1) 「撥音」を単語、短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年		2年		3年		4年	
	単語	短文	単語	短文	単語	短文	単語	短文
1	2.50	3.63	2.63	3.28	2.63	2.56	2.38	2.53
2	3.13	3.06	3.00	3.03	2.06	2.13	2.06	2.44
3	2.88	2.97	2.25	2.47	2.38	2.56	2.88	2.13
4	3.73	3.44	2.81	2.69	2.44	2.06	2.69	2.09
5	2.75	3.88	2.19	2.56	2.56	3.16	2.38	2.56
6	3.25	3.69	2.50	2.63	2.06	2.53	2.69	2.09
7	3.25	3.75	2.38	2.47	2.44	2.13	2.75	2.06
8	3.25	3.28	3.00	2.47	2.31	2.31	2.38	2.59

11) 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声」『音声研究』第3巻3号, 日本音声学会, 26頁-35頁。

9	3.50	3.34	2.31	2.78	2.50	2.41	2.19	1.97
10	3.44	3.66	2.56	2.31	3.13	2.63	2.75	2.63
平均値	3.17	3.47	2.56	2.69	2.45	2.45	2.51	2.31

(2) 促音

「促音」を例文ごとに不自然と評価されて示したのが次の表3)である。表3)の全学年の平均をみると単語では、例文3)の「かっき〈活気〉」[kakkɪ]と「げっこう〈月光〉」[ʃgekkoŋ](2.76)が、短文では例文5)の「括弧[kakko]の中は過去[kako]の形だ」(3.57)という例文が一番不自然である。単語と短文両方とも、促音が[k]のまえにあるとき発音の不自然さが一番高い。韓国語を第一言語とする日本語学習者にとって、日本語の無声破裂音[p][t][k]の発音が難しいことは、言いやまりの仮説からも予測できる。しかし、この調査の結果では、日本語の無声破裂音の中でも[k]の発音がもっとも難しいことが明らかとなった。また、母音[o]の影響も考えられる。

西端(1993)¹²⁾は日本語の「促音」の知覚の研究で、「促音」の閉鎖持続部分に後続する子音が[k]である場合には、[t][p]である場合よりも、日本語第一言語話者、中国語第一言語話者ともに短い閉鎖持続時間で3拍語であると判断されていることがわかったと述べている。西端(1993)の研究結果は、本研究と同様である。これについても、今後もっと緻密な実証研究が必要と考える。

表3) 「促音」における不自然さの量(1～5)に関する例文ごとの評価結果

例文		1年生	2年生	3年生	4年生	全学年
単語	1)	2.78	2.10	2.20	1.95	2.26
	2)	3.10	2.43	2.25	2.28	2.51
	3)	3.32	2.65	2.58	2.50	2.76
	4)	3.30	2.40	2.70	2.37	2.69
短文	1)	3.47	2.85	3.03	2.75	3.02
	2)	3.65	2.53	2.92	2.88	2.99
	3)	4.22	3.23	3.40	3.00	3.46
	4)	3.52	2.80	2.80	2.72	2.96
	5)	4.30	3.42	3.52	3.03	3.57

12) 西端千香子(1993) 「閉鎖持続時間を変数とした日本語促音の知覚の研究 日本語第一言語話者と中国語第一言語話者の比較」 『日本語教育』81号, 日本語教育学会。

	6)	4.20	3.30	3.05	3.60	3.54
	7)	4.07	3.20	2.95	2.75	3.24

表4), 表4-1)における「促音」の場合には, 2年生から3年生になるときに不自然さが高くなる傾向がみられる。さらに, 「促音」を単語と短文に分けてみても, 単語と短文の両方とも2年生から3年生になるときに不自然さが高くなっている。この傾向はMajorのインターランゲージ音声体系の発達上のプロセスに当てはまる。すなわち, 発達上のプロセスでは日本語の「促音」の不自然さが初期に徐々に減少し, 中期にもっとも少なくその後ふたたび高くなっていく現象である。

表4) 「促音」における不自然さの量に関する(1-5)学年ごとの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.70	2.60	3.20	2.90
2	4.00	2.80	2.90	2.80
3	3.00	2.90	2.50	2.60
4	3.50	3.10	3.00	3.10
5	3.50	3.00	2.60	3.10
6	3.30	2.30	3.00	2.60
7	3.70	3.10	2.80	2.00
8	4.50	3.10	2.90	2.80
9	3.20	2.80	2.80	2.30
10	3.90	2.30	2.90	2.90
平均値	3.63	2.81	2.85	2.71

また, 日本語の「促音」にEckmanの有標性の概念を加えると韓国語を第一言語とする日本語学習者には, 「撥音」と同様有標性が高い。これは, 日本語の音節構造(CV)と韓国語の音節構造(CVC)の違いから音節長の問題である(松崎1999)¹³⁾。「促音」は韓国語を第一言語とする日本語学習者には, ほとんど発音が定着してないようにもわれる。

表4-1) 「促音」を単語, 短文とに分けての評価結果

被調査者	1年	2年	3年	4年

¹³⁾ 注10と同様。

	単語	短文	単語	短文	単語	短文	単語	短文
1	2.75	4.18	1.88	3.04	2.38	3.71	2.31	3.18
2	3.44	4.36	2.38	3.11	2.00	3.36	2.38	3.07
3	2.69	3.25	2.81	2.96	2.38	2.61	2.06	2.93
4	3.00	3.71	2.69	3.36	2.38	3.29	2.19	3.61
5	2.50	4.04	2.63	3.29	2.38	2.75	2.50	3.50
6	3.06	3.50	1.88	2.57	2.69	3.25	2.25	2.86
7	3.31	3.96	2.56	3.39	2.63	2.82	2.00	2.04
8	4.44	4.61	2.63	3.36	2.50	3.07	2.19	3.11
9	2.50	3.54	2.50	3.00	2.44	3.07	2.00	2.46
10	3.50	4.07	2.60	2.39	2.56	3.04	2.88	2.86
平均値	3.12	3.92	2.39	3.05	2.43	3.10	2.28	2.96

(3) 「撥音と促音」

表5) 「撥音と促音」の例文ごとの評価結果

例文		1年生	2年生	3年生	4年生	全学年
単語	1)	3.37	2.65	2.50	2.65	2.79
	2)	3.25	2.85	2.35	2.35	2.70
	3)	2.88	2.32	2.02	2.40	2.41
	4)	2.95	2.25	2.20	2.20	2.40
	5)	2.95	2.22	2.17	2.12	2.37
短文	1)	3.45	2.37	2.35	2.35	2.63
	2)	3.25	2.50	2.48	2.25	2.62
	3)	3.25	2.48	2.37	2.42	2.63
	4)	2.98	2.70	2.77	2.53	2.74
	5)	3.57	2.52	2.35	2.25	2.68

「撥音と促音」の不自然さについての評価を示したのが、下の表5)である。表5)の全学年の平均を例文ごとにみると単語では、例文1)の「かんそう[kanso:]」と「かつそう[kasso:]」が、短文では、例文4)の「人気[ninki]作家の日記[nikki]を読んだ」という例文が一番不自然さが高くなっていた。短文での不自然さに対しては、まえの「促音」のところでも述べたよう、日本語の無声破裂音[k]の影響で不自然さが高くなったと思われる

る。また、単語の場合は、母音[o]と長母音の発音の影響もあったと考えられる。

「撥音と促音」についても、表6)の場合、高学年になるほど不自然さが少なくなる傾向がみられる。とくに1年生の不自然さが顕著に高くなっている。「撥音と促音」をさらに細かく単語と短文に分けた表6-1)では、各学年を通じて、短文の方の不自然さが高くなっている。単語の場合には3年生から4年生となるときに不自然さが高くなっている。これは、撥音と促音の短文の場合は、Majorのインターランゲージ音声体系の第一言語干渉(言語間の誤り)に当てはまる。すなわち、日本語発音の「撥音と促音」の不自然さが発達過程の初期では第一言語の干渉が優勢で高くなっているが、徐々に少なくなっていく現象である。単語の場合は、発達上のプロセスに当てはまる。すなわち、発達上のプロセスは「撥音と促音」の単語の不自然さが初期に徐々に減少し、中期にもっとも高くなりその後、再び低くなっていく現象である。

表6) 「撥音と促音」における不自然さの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.60	2.70	2.40	2.50
2	2.80	2.60	2.20	2.30
3	3.00	2.50	2.60	2.30
4	2.80	2.70	2.20	2.50
5	2.80	2.50	2.20	2.60
6	2.90	2.10	2.20	2.50
7	3.70	2.30	2.30	2.10
8	4.00	2.80	2.70	2.30
9	3.10	2.50	2.30	2.10
10	3.40	2.10	2.50	2.30
平均値	3.19	2.49	2.36	2.35

表6-1) 「撥音と促音」を単語、短文とに分けての評価結果

被調査者	1年		2年		3年		4年	
	単語	短文	単語	短文	単語	短文	単語	短文
1	3.50	3.65	2.85	2.60	2.15	2.65	2.65	2.45
2	2.70	2.80	2.70	2.45	2.10	2.30	2.50	2.10
3	2.55	3.35	2.65	2.40	2.80	2.40	1.90	2.75

4	2.85	2.70	2.40	3.05	2.05	2.30	2.30	2.60
5	2.55	3.15	2.60	2.35	2.10	2.20	3.00	2.20
6	2.95	2.80	2.05	2.20	2.10	2.30	2.25	2.75
7	3.65	3.80	2.25	2.40	2.05	2.65	2.00	2.20
8	4.00	3.90	2.55	2.95	2.55	2.75	2.45	2.15
9	2.65	3.50	2.45	2.60	2.05	2.65	2.15	2.10
10	3.40	3.35	2.10	2.15	2.55	2.45	2.25	2.30
平均値	3.08	3.30	2.46	2.52	2.25	2.47	2.35	2.36

(4) 拗音と直音

拗音と直音を拍数の同じもの(語頭, 語中尾)と拍数の違うもの(語頭, 語中尾, 短文)とに分けて1年生から4年生まで例文ごとに, 評価してもらった結果を示したのが次の表7)である。まず, 「拗音と直音の拍数の同じもの」をみると語頭では例文5)の「ちゅうしん〈中心〉」[tʃw:ʃiN]と「つしん〈通信〉」[tsw:ʃiN](3.58)が, 語中尾では例文3)の「かんじょう〈感情〉」[kandjo:]と「かんぞう〈肝臓〉」[kandzo:](3.88)の例文の不自然さがもっとも高くなっている。松崎(1999)¹⁴⁾は韓国語話者の発音の誤用と原因について, 次のように述べている。

日本語では, 直音・拗音/カ/:/キャ/, /サ/:/シャ/等がほぼ規則的に対応し, 韓国語でも非口蓋化音・口蓋化音の/가/[ka]:/갸/[kja], /사/[sa]:/샤/[ʃja]等が対応するため, 正の転移が生じ, 拗音の多くはたやすく習得される。しかし破擦音“ス”は語頭では[tʃ], 語中では[dʒ]となる傾向が強く, [ts][dz]がないため, /ツ/:/チュ/や/ザ/:/ジャ/等の区別が難しい。

また, 語頭の例文5)の不自然さが一番高く現われたのは, 韓国人にとってとくに難しい発音である無声破擦音チとツの影響であると思われる。次の語中尾の例文3)では, 日本語のジャ, ジュ, ジェ, ジョをなす有声音[dz]に相当するものは, 韓国語の異音には存在しないということから, この発音は韓国語を第一言語とする日本語の学習者には難しいことが予測された。

¹⁴⁾ 注10と同様。

表7) 「拗音と直音」における例文ごとの不自然さの評価結果

	例文	1年生	2年生	3年生	4年生	全学年	
同じ拍数	語頭	1)	3.03	2.52	2.47	2.60	2.66
		2)	2.73	2.88	2.47	2.48	2.64
		3)	2.70	2.38	2.17	2.00	2.31
		4)	2.67	2.55	2.45	2.47	2.54
		5)	3.87	3.73	3.32	3.37	3.58
	語中尾	1)	2.60	2.45	2.53	2.32	2.48
		2)	2.73	2.83	2.40	2.53	2.62
		3)	4.20	4.15	3.53	3.65	3.88
		4)	3.23	3.28	2.80	3.03	3.08
		5)	3.20	2.73	2.15	2.32	2.60
違う拍数	語頭	1)	3.40	2.93	2.65	2.25	2.81
		2)	3.53	2.60	2.72	2.42	2.82
		3)	3.95	3.20	2.92	2.30	3.09
		4)	3.35	3.07	2.57	2.97	2.99
		5)	3.27	2.90	2.67	2.45	2.83
	語中尾	1)	3.20	2.97	3.05	2.52	2.94
		2)	4.07	3.67	3.70	3.38	3.71
		3)	3.58	3.13	3.23	2.88	3.20
短文	1)	3.05	2.68	2.83	2.47	2.76	
	2)	3.13	2.58	2.70	2.45	2.71	
	3)	2.68	2.47	2.45	2.40	2.50	
	4)	3.05	2.68	2.47	2.32	2.63	
	5)	3.33	2.90	2.38	2.25	2.71	

拍数に差があるものでは、語頭の例文3)の「しゅうち〈周知〉」としゅうち〈私有地〉」[ʃijɔtʃi](3.09)、語中尾の例文2)の「だんじょ〈男女〉」[dandjo]と「だんじょく男児よ」[dandzijo](3.71)、短文の例文1)の「次号[dzigo:]はその事業[dzigo:]の特集だ」(2.76)と不自然さが高くなっている。語頭の例文3)では、母音[ɔ]と子音[tʃi]の影響で不自然さが高くなったと思われる。語中尾の例文2)の場合は、前述した語中尾「かんじょう」と「かんぞう」と同じようである。短文の例文1)では長母音と母音[o]が

不自然さに大きくかかわっている。

表8)の「拗音と直音」については高学年になるほど不自然さが少なくなる傾向がある。

「拗音と直音」をさらに細かくみて、拍数の同じもの(語頭、語中尾)、拍数の差があるもの(語頭、語中尾、短文)に分けたのが表8-1)である。「拗音と直音の違う拍数」の語頭、短文は学年があがるにつれて不自然さが少なくなる傾向がある。さらに、「拗音と直音拍数が同じもの」の語頭では3年生(2.58)から4年生(2.59)と、語中尾では3年生(2.68)から4年生(2.77)となるときに、「拗音と直音の拍数が違うもの」の語中尾では2年生から(3.26)3年生(3.32)となるときに不自然さが高くなっている。

表8)「拗音と直音」における不自然さの評価結果

被調査者	1年生	2年生	3年生	4年生
1	3.40	3.00	2.50	2.80
2	3.20	3.00	2.50	2.50
3	2.80	2.60	3.00	2.70
4	3.20	3.60	2.80	2.50
5	3.10	2.80	2.50	2.50
6	3.20	2.60	2.60	2.50
7	3.30	2.50	2.50	2.50
8	3.10	3.50	2.60	2.80
9	3.30	2.90	3.30	2.40
10	3.80	2.70	2.80	2.90
平均値	3.24	2.92	2.72	2.60

表8-1)「拗音と直音」の語頭と語中尾と短文とに分けての学年ごとの評価結果

被調査者	1年					2年				
	同じ拍数		違う拍数			同じ拍数		違う拍数		
	語頭	語中尾	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	語頭	語中尾	短文
1	3.30	2.95	3.95	4.00	3.05	3.00	2.95	2.95	3.33	2.75
2	2.80	3.15	3.75	4.25	2.60	2.80	2.85	3.30	3.67	2.55
3	2.60	3.10	2.45	2.83	3.25	2.75	3.00	2.30	2.75	2.40
4	2.60	2.65	4.00	3.67	3.40	3.05	3.00	4.05	4.67	3.70
5	2.30	2.85	3.35	4.08	3.30	2.60	3.35	2.85	2.92	2.55

6	3.25	3.55	3.10	3.25	2.85	2.90	3.30	2.30	2.58	2.00
7	3.35	3.30	3.60	3.67	2.75	2.50	2.65	2.35	2.75	2.55
8	2.95	3.15	3.15	3.33	2.85	2.90	3.70	4.55	3.17	3.15
9	0.40	3.30	3.40	3.42	2.90	3.10	3.25	2.15	3.58	2.50
10	3.45	3.90	4.25	3.67	3.50	2.50	2.80	2.60	3.17	2.40
平均値	3.00	3.19	3.50	3.62	3.05	2.81	3.09	2.94	3.26	2.66
被調査者	3年					4年				
	同じ拍数		違う拍数			同じ拍数		違う拍数		
	語頭	語中尾	語頭	語中尾	短文	語頭	語中尾	語頭	語中尾	短文
1	2.65	2.20	2.20	3.25	2.70	2.55	2.95	2.55	3.33	2.60
2	2.55	2.90	2.10	2.92	2.20	2.50	2.75	2.45	3.00	2.20
3	3.45	3.00	2.75	2.58	2.95	2.45	2.85	2.90	2.83	2.30
4	2.30	2.25	3.70	4.00	2.45	2.15	2.35	2.55	2.92	2.70
5	2.45	2.75	2.25	2.33	2.55	2.50	3.10	2.25	2.33	2.30
6	2.75	2.75	2.30	2.75	2.45	2.75	2.75	2.30	2.33	2.15
7	2.20	2.45	2.45	3.50	2.45	2.30	2.70	2.25	2.83	2.35
8	2.10	2.50	3.00	3.58	2.35	2.70	3.00	2.45	3.58	2.50
9	2.50	2.90	3.85	4.92	3.15	2.80	2.15	2.45	2.75	2.20
10	2.85	3.10	2.50	3.42	2.40	3.15	3.10	2.65	3.33	2.50
平均値	2.58	2.68	2.71	3.32	2.57	2.59	2.77	2.48	2.92	2.38

表9)に示される40人全員(1年生～4年生)の「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」を評価させた結果をみると、一番不自然なのは「促音」(3.00)であり、全体の四項目と不自然さと一番密接に関係があるのは、「撥音と促音」($r=0.65$)、「拗音と直音」($r=0.65$)である。ここで注目すべきことは、日本語の不自然さが「促音」に非常に大きくかかっているということである。韓国語を第一言語とする日本語学習者の音声教育においては、今後、この結果に示されているような「促音」の面を重視する必要がある。

表9-1)に示すようにこれらをさらに細分化してみると、一番不自然なのは「促音」の短文(3.26)と「拗音と直音の拍数の違うもの」の語中尾(3.28)ということになる。相関より、全体の四項目との不自然さと一番密接に関係があるのは、「拗音と直音の拍数の違うもの」の中では、語頭($r=0.59$)ということになる。しかし、これらの相関関係は比較的低いため、

全体との不自然さにはあまりかわりがないということになる。

分析結果をまとめると次のようになる。まず、「撥音」と「促音」の場合は「促音」の方が不自然さがもっとも高くなっている。したがって、韓国語を第一言語とする日本語学習者には、「撥音」より「促音」のほうがより発音しにくいといった傾向が認められる。また、これらをさらに単語と短文とに分け項目別にみると、「撥音」の場合は短文のほうに、「促音」の場合は単語のほうにその不自然さがもっとも密接に関係していることがわかる。この結果で明らかになったのは、韓国語を第一言語とする日本語学習者には、「撥音」より「促音」のほうの発音が困難となるということである。

表9) 40人全員(1年生～4年生)の「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」
評価結果

	撥音	促音	撥音と促音	拗音と直音
平均値	2.71	3.00	2.60	2.87
相関値	0.54	0.54	0.65	0.65

この「撥音」と「促音」の場合、韓国語を第一言語とする日本語学習者には両言語の音節構造の違いによって(日本語の典型的な音節構造は開音節であるのに対し、韓国語の典型的な音節の構造は閉音節である)誤りが生じてくる。すなわち、日本語の「撥音」と「促音」が現われた場合に、それらは韓国語の終声(CVC1音節構造でCに該当する)で短く発音されることになる。

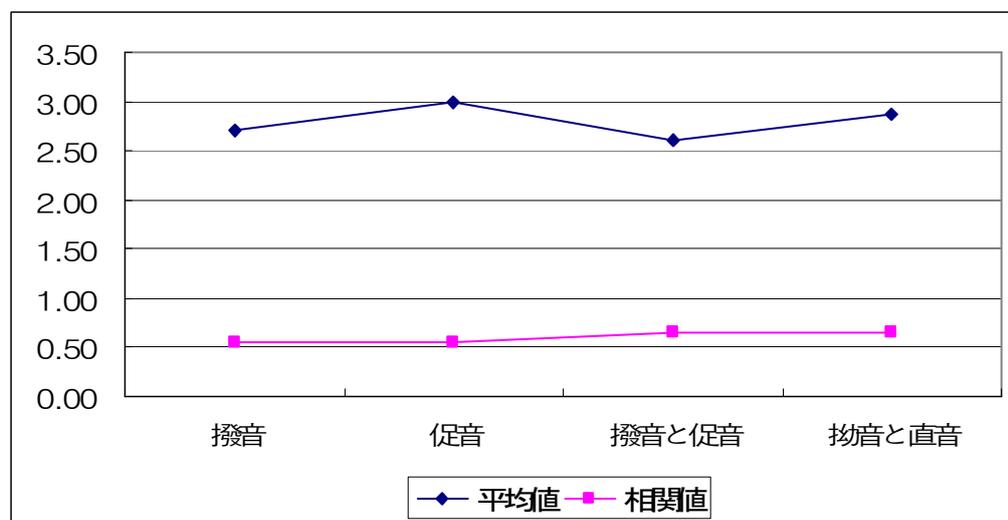


図1) 「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」の評価結果(平均値, 相関値)

表9-1) 「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」を語頭、語中尾、単語、短文とに分けての評価結果

	撥音		促音		撥音と促音		拗音と直音				
	単語 a	短文 b	単語 c	短文 d	単語 e	短文 f	拍数の同じもの		拍数の違うもの		
							語頭 g	語中尾 h	語頭 i	語中尾 j	短文 k
平均値	2.67	2.73	2.56	3.26	2.53	2.66	2.74	2.93	2.91	3.28	2.66
相関値	0.27	0.40	0.43	0.37	0.51	0.33	0.39	0.46	0.59	0.49	0.53

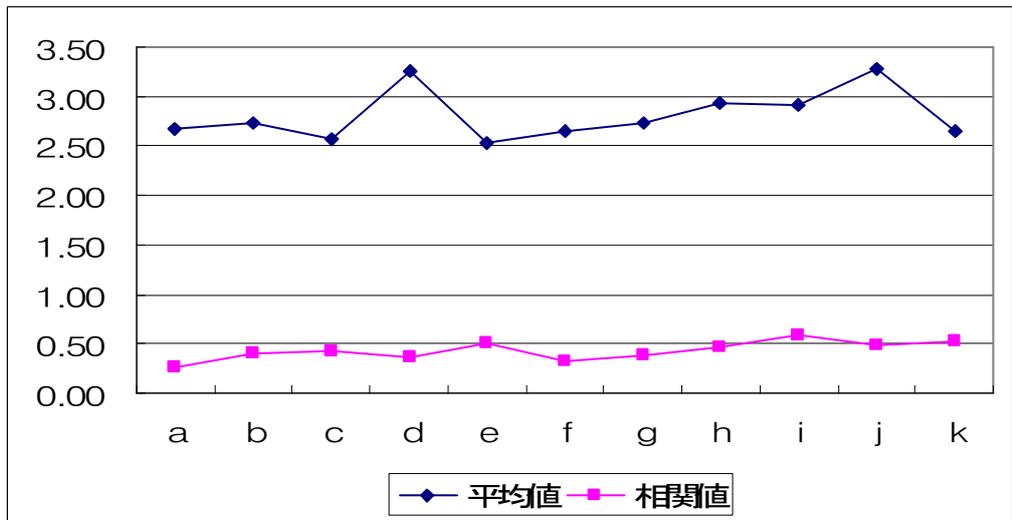


図1-1) 「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」を語頭、語中尾、単語、短文とに分けての評価結果(平均値、相関値)

3.5 調査結果のまとめ

日本語の「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音の拍数同じもの」「拗音と直音の拍数の違うもの」の言いあやまりの調査結果の分析をまとめると、次のようである。

1. 日本語発音のどのような音声環境が、日本語発音の不自然さにもっとも影響を与えるか。
 - 1) 日本語発音の不自然さにもっとも影響を与える音声環境は、「撥音」では「撥音」の[m][b]のまえ、有声破裂音[g]が語頭に現われたとき、長母音が入ってるときなどである。
 - 2) 日本語発音の不自然さにもっとも影響を与える音声環境は、「促音」では「促音」の無声破裂音[k]が現われたときに不自然さが大きくなるのである。

- 3) 日本語発音の不自然さにもっとも影響を与える音声環境は、「撥音と促音」では「促音」と同じように無声破裂音[k]と母音[o]が現れたときに不自然さが大きくなるのである。
- 4) 日本語発音の不自然さにもっとも影響を与える音声環境は、「拗音と直音の拍数の同じもの」では、語頭では「チとツ」の語中尾、有声破擦音[dz]、短文では「長母音」と「母音」[o]が、不自然さに大きくかかわっているのである。
2. 韓国語を第一言語とする日本語学習者のインターランゲージの音声体系に共通する特徴は何か。
- 1) 日本語学習者のインターランゲージの音声体系に共通する特徴をみると第一言語干渉(言語間の誤り)の場合に、「撥音」の短文、「撥音と促音」の短文、「拗音と直音の拍数の違うもの」の語頭、短文である。
- 2) 日本語学習者のインターランゲージの音声体系に共通する特徴をみると発達上のプロセスでの場合に、「撥音」の単語、「促音」の単語、短文、「撥音と促音」の単語、「拗音と直音の拍数の同じもの」の語頭、語中尾と、「拗音と直音の拍数の違うもの」の語中尾である。
3. 韓国語を第一言語とする日本語学習者の日本語音声の習得上、不自然さが一番高い発音と、発音の不自然さともっとも高い相関関係があるのは、どのような発音であるか。

日本語発音の習得上、韓国語を第一言語とする日本語学習者の一番不自然な項目は、「促音」の短文(3.26)と「拗音と直音の拍数の違うもの」(3.28)である。また、全体の四つの項目と不自然との相関の場合は、「撥音と促音」と「拗音と直音」が同様に不自然さが高くなっているのである。

4. 韓国語を第一言語とする日本語学習者の第一言語からの影響とは別に、言語の普遍的特性(有標性)が日本語音声の習得に影響を与えるのか。

ここでは、有標性の概念を対照分析と組み合わせて、言いやまりの仮説に基づいた分析を行った。日本語の有声破裂音[g]が語頭に現われた場合と、無声破裂音[k]と無声破擦音[tʃi][tsɯ]が現われた場合は有標性が高いため難しいことが予測された。日本語の「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音の拍数の同じもの」「拗音と直音の拍数の違うもの」の分析結果でも、これらの音が現われた例文の不自然さをもっとも高く現われたのである。

このような日本語発音の分析結果は、日本語の音声教育に深く関与する重要な結果を示しているといえる。

4. おわりに

本研究では、日本語音声の中で「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音」について聴覚的、音声（調音）学的な特徴にその焦点をおき、韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す（読む）ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い、その分析を行った。今後の韓国における日本語音声教育の方法改善の上では、この調査結果に示されているような面がとくに重視されなければならないと思われる。

本研究では、研究対象の外におかざるをえなかった、「撥音」「促音」「拗音と直音」の知覚心理的特性への反映の問題、「撥音」「促音」「拗音と直音」と発話速度との関係などは、今後の課題にしておきたい。

【参考文献】

《日本語文献》

- 今田滋子(1981)『教師用日本語教育ハンドブック 6 発音』国際交流基金128頁-134頁。
- 窪蘭晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店。
- 窪蘭晴夫(2003)「音韻の獲得と言語の普遍性」『音声研究』第7巻 第2号, 5頁-17頁。
- 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』第7巻2号, 日本音声学会, 70頁-83頁。
- 中東靖恵(1998)「韓国人の英語音声と日本語音声」『音声研究』2 1, 日本音声学会, 72頁-82頁。
- 西端千香子(1993)「閉鎖持続時間を変数とした日本語促音の知覚の研究 日本語第一言語話者と中国語第一言語話者の比較」『日本語教育』81号, 日本語教育学会。
- 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声」『音声研究』第3巻3号, 日本音声学会, 26頁-35頁。
- 柳京子(2009)『日本文化学報』第40 韓国日本文化学会, 11頁-12頁。

《英語文献》

- Eckman, F.R.(1981)On predicting phonological difficulty second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, Vol.4 No.1, pp.1830.
- Jakobson,Roman(1939) *Les lois phoniques du Langage enfantin et leur place dans la phonologie générale* 邦訳「幼児言語の音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。
- Jakobson,Roman(1941/68) *kindersprache, Aphasie und allegemeine Lautgesetze* Child Language Aphasia and Phonological Universals. TheHague: Mouton 邦訳「幼児言語, 失語症および一般音法則」服部四郎(編・監訳)(1976)『失語症と言語学』岩波書店。
- Major,R.C.(1987) A model for interlanguage phonology. in Ioup, G. and Weinberger, S. H.(ed), pp. 101-124.
- Mihian,H.R.(1958) A development of Reading Scale Technique Based upon Informal, Oral Descriptions for Measuring Foreignisms to American Speesh Master's thesis, Ohio State University.
- Tarone,E.(1980)Some influences on the syllable structure of inter language phonology. *IRAL(International Review of Applied Linguistics in Language Teaching)* Vol.18 No.2, pp139-152.

参考資料編

1) 撥音

(単語)

- 1) さんま 2) こんな 3) さんか<参加> 4) かんしん<関心>
しんぶ<深部> たんにん<担任> ひんか<品格> せんそう<戦争>

[短文]

- 1) 昔の人物や事物を研究したい。
- 2) 自分は人文科学に向いているか。
- 3) あんな穴は珍しい。
- 4) インドの緯度はどのくらいか。
- 5) それには過激派も感激した。
- 6) あの銀行の建物は技巧的すぎる。
- 7) 幹事の家が火事だ。
- 8) 火星の研究はまだ完成していない。

2) 促音

(単語)

- 1) すっぱい<酸っぱい> 2) いった<言った> 3) かっき<活気>
ねったい<熱帯> げっこう<月光>

- 4) いっせい<一斉> けって<決して>

[短文]

- 1) スパイは酸っぱいジュースを作った。
- 2) 今ここにいた人はどこへ行ったのだろう。
- 3) 手紙を一通書いたら胃痛がひどくなった。
- 4) 柿取り競争は活気があった。
- 5) 括弧の中は過去の形だ。
- 6) 画商たちは合唱も上手だ。
- 7) 今日の実習は自習だ。

3) 撥音と促音

(単語)

- 1) かんそう<感想> 2) だんすい<断水> 3) さんか<参加> 4) ふんし<文士>
かっそう<滑走> だっすい<脱水> さっか<作家> ぶっし<物資>

- 5) ぶんたい<文体>

ぶったい<物体>

[短文]

- 1) 滑走の感想を話した。
- 2) 根気よく国旗を直した。

3) その会には作家も参加した。

4) 人気作家の日記を読んだ。

5) 必死で品詞を覚えた。

4) 拗音と直音

(1) 拍数の同じもの

(語頭)

1) きゃく<客> 2) しゅしく<主旨> 3) きゅうこう<急行> 4) しょうだん<商談>
かく<核> すしく<寿司> くうこう<空港> そうだん<相談>

5) ちゅうしん<中心>

つうしん<通信>

(語中尾)

1) かしゃ<貨車> 2) いっしょ<一緒> 3) かんじょう<感情>

かさ<傘> いっそ<いっそ> かんぞう<肝臓>

4) ししょう<支障> 5) はっぴょう<発表>

しそう<思想> はっぼう<発砲>

(2) 拍数の差があるもの

(語頭)

1) きゃく<客> 2) じゅう<十> 3) しゅうち<周知> 4) ひょう<表>

きやく<規約> じゅう<自由> しゅうち<私有地> ひょう<費用>

5) しょうにん<証人>

しょうにん<使用人>

(語中尾)

1) いしゃ<医者> 2) だんじょ<男女> 3) ふりよ<不慮>

いしやく<石屋> だんじょ<男児よ> ふりよ<不利よ>

[短文]

1) 次号はその事業の特集だ。

2) 校医が脳困を調べた。

3) 貨車の中に傘を忘れた。

4) あの法科の評価はどうか。

5) 十人が自由を求めて集まった。

要 旨

本研究では、日本語音声の中で「撥音」「促音」「撥音と促音」「拗音と直音の拍数同じもの」「拗音と直音の拍数の違うもの」について聴覚的、音声（調音）学的な特徴にその焦点をおき、韓国語を第一言語とする学習者が日本語を話す（読む）ときに起こる日本語の言いあやまりについて調査を行い、その分析を行った。本研究では先行研究で明らかにされていない、次の二点に力点をおき、研究を行った。

1. なぜ、言いあやまりが起こるか、その原因を探るために言いあやまりの中でとくに注目されているインターランゲージ(Interlanguage:中間言語)に関する仮説を設定し、その仮説を言いあやまりの調査から検証した。
2. 従来の主観だけによる方法から脱却して、調査資料の検討、あるいは分析結果に基づく研究をした。

これらは先行研究の何れにも十分に組み込まれていない研究である。

本論文では、このような問題意識に基づいて言いあやまり研究を実践的な（教育的な面）の側面から、より体系的にとらえていくことを目指した。

今後の韓国における日本語音声教育の方法改善の上では、本研究の調査分析結果に示されている面がとくに重視されなければならないと思われる。

本研究では、研究対象の外におかざるをえなかった、撥音・促音・拗音と直音の知覚心理学特性への反映の問題、撥音・促音・拗音と直音と発話速度との関係などは、今後の課題にしておきたい。

キーワード：撥音，促音，拗音，直音，言いあやまり，干渉，インターランゲージ，体系、有標性概念，発達的プロセス

투 고 : 2009. 11. 30
1차 심사 : 2009. 12. 12
2차 심사 : 2010. 01. 09